

事業者インタビュー 座談会



有限会社office hanaの代表取締役
NPO法人 Co.to.hanaの理事長
漆原由香利さん

「子どもからお年寄りまで障害のある人もない人も一緒に安心して過ごせる場所をつくる」ことをミッションに、高橋、茨木等でアチバレット事業（ミニ幼稚園）、就労継続支援B型事業やデザイナーズなどに取り組む。



NPO法人 True Colors 理事長
高橋紀子ちゃん

色覚についてのイベント、研修、講演や色覚補正レンズ・色覚異常体験レンズを通じて、「人が見えている色はそれぞれ違う」という気づきを広め、カラーバリアフリー社会の実現に向けて活動している。



NPO法人 Co.to.hana 代表理事
西川亮さん

デザインで社会課題、地域の問題を解決するNPO。チラシやウェブサイトから空間まで、ありとあらゆるものをデザインする。みんな農園などのプロジェクトやNPO・NGO対象のデザイン研修も手がける。

大阪NPOセンターの支援を得て、新しいステージに挑戦しています。

支援を受けるありがたさを実感

▷大阪NPOセンター(以下、センター)と関わるきっかけや、これまでの支援内容を教えて下さい。

漆原 2006年の志民ファンドがきっかけです。いろんな世代が集える場を作りたくてカフェ事業を提案し、選んでいただきました。その時に、まず既存事業を見直していきましょう、ということで1年間を通して支援していただいたのが最初です。

日々の仕事に追われ目の前のことしか見ていませんでしたが、私が抱えている仕事を書き出すことなど提案していただき、私以外の人でもできる仕事は手放していくことで自分に余裕ができました。また、利用者も増え、事業が伸びるきっかけがいただけました。

高橋 2011年にNPO法人を設立した頃は、人口の5%にあたる色覚に問題がある人に対して、色覚補正レンズの存在をどう伝えるかばかりを考えていました。今思えば、どこに向かって何を言えよいかわからなかったのだと思います。大阪NPOプラザが閉鎖されて事務所はなくなるし、どうしていいか困っていた時に、「センターに相談すればよい」と教えてもらい、翌日すぐに相談に行きました。

事務局相談で話を聞いてもらっているうちに、私たちの活動は、5%ではなく一般色覚の95%の方々に「安心安全な色使いの社会(=カラーバリアフリー)」について発信していけばよいのだ、とわかりました。それ以来、アドバイスをもらうだけでなく、イベントやソーシャルビジネスプランコンペに声をかけていただきました。センターと出会うことでどんどん新しいことにチャレンジできています。

西川 僕は、Co.to.hanaを立ち上げて間もなく、センターに相談していました。3年くらい前から学生のインターンシップ受け入れや視察プログラムで交流させてもらっています。今は、センターからの紹介で金融機関の商品パンフレットを制作したり、国交省の調査事業に取り組んでいます。特に、調査事業は初めてのことでセンターにアドバイスしてもらいながら進めていますが、センターと関わりがなければ、調査事業を提案するという発想はありませんでした。金融機関とも、僕らだけなら直接仕事を受けることはなかったと思います。自分たちでは気付かない仕事を得る機会や新たな事業展開の可能性をいただいています。

高橋 それは私たちも同じです。行政との協働事業に取り組んだ際に、今まで接点のなかったNPOや大学とコラボする機会をいただき、新しい視点と今までにはない人とのつながりや行政の委託事業受託という実績も得ることが出来ました。

アドバイスの中からひらめきが生まれることも

▷センターの支援やセンターとの連携・協働によって組織に変化はありましたか？

高橋 社会全体に向けて、安心安全な色使いの社会(=カラーバリアフリー)を作ることを発信したいという考え方に変わったことが大きいです。目標とそこに到達するためのストーリーが明確になって、具体的な展望が持てるようになりました。

漆原 センターとは2006年からもう10年間の関わりがありますが、事例報告の機会をいただいたり、CB事例としてヒアリングしていただいたり、自分たちの活動を色々な方に知っていただける機会もたくさんいただいています。その度に組織や活動を振り返ることができて、それが次の一歩につながっています。また、他のNPOや志のある事

業者の方々と出会わせていただくことでの刺激も多いです。

高橋 ソーシャルビジネスプランコンペに声をかけていただいたのも良かったです。応募するのは大変でしたが、応募申請作業を通して、組織が次にどこに向かうべきか、考えを整理することができました。途中のブラッシュアップも勉強になりました。

センターの後押しで、常に新しいことにチャレンジできる

▷今後の展望を教えてください。また、その中で大阪NPOセンターに期待することは何でしょうか。

漆原 「ポタジェプロジェクトの実現です。小さな農園を軸に、多世代交流の場を作り、子どもに限らず地域の人が誰でも気軽に利用できる食堂も作りたくと思っています。保育・介護人材不足の中、ばれっとの担い手がなくて困っているのに、プロジェクトに関わるボランティアを集めるのは難しいのではという声もありますが、発想を転換して入口を作っていければ担い手が出てくるし、実現可能だと思うんです。

▷発想を転換することは大切な視点ですね。

漆原 はい。ばれっとには、若いお母さんたちの会員が300人くらいいます。すごい宝を持っていたのに、そこにアクセスできてなかった。もっと発信すれば、いろんなことをやりたい人がいるはず…。そんな魅力ある活動になるよう、センターからヒントをいただけたら嬉しいです。

単体では難しい事業も、センターと協働なら実現できる

西川 とくに資金がない、立ち上げて間もない団体は、広報が後まわしになっているという現状があります。事業がうまく

いったから広報をやるのではなく、広報も事業を作るのと一緒にやっていると、事業が伝わることで会費が集まるとか、利用者が増えるとかすれば、ゆくゆくはスタッフの給料も上げられますから、広報は大事です。

▷広報が得意なNPOも多いですね。

西川 Co.to.hanaはNPOの情報発信・広報力を高め、支援する組織です。だからこそ、立ち上げ期から様々なNPOや団体と関わっているセンターと一緒に事業を作っていきたいですね。NPOの広報のための助成プログラムを作るとか、研修をするとか、そういうことを協働できればと思います。なかなかNPOで食べていくのは難しいですが、情報発信力や広報力を高めたいNPOと、デザイナーやデザインを学ぶ学生とを繋げていきたい。デザイナーが活躍できるマーケットがそこにはあると思っています。僕らだけではできないので、センターと一緒にやっていきたいです。

センターとともに、新たな価値の創造を

高橋 色覚についての講演や研修の依頼が増えているので、今から講師を養成していく必要があります。色の見え方は、それぞれ違って当たり前と認められる文化、特に子どもたちには個々人の色の見え方の違いに早くから気付き、そして周りの子どもたちも多様性を受け入れる事ができる文化を創っていきたいのです。「色の見え方が違うかな?」「でもそれがあなたの個性ですよ」という、幼い子どもたちに分かりやすい絵本を制作しました。子どもの色覚問題で悩むお母さんに寄り添い、受け止めるサポートも必要です。そういうことを、センターと協働して実現していきたいと思っています。これまではボランティア的な発想でしたが、体験レンズ、補正レンズを活用した講習や、色のカウンセリングなどのビジネスモデルをセンターと一緒にやっていきたいです。

